

## 論文審査報告の結果の要旨

論文提出者氏名 安田 佳代 (やすだ かよ)

論文題目 「国際連盟保険機関から世界保健機関、 ユニセフへ  
—新しい安全保障としての「ポジティブ・ヘルス」の形成—

提出論文は、国際衛生事業の展開を、国際連盟期から国際連合初期にいたるまで実証的に解明した研究である。国際連盟に関する研究は、かつては安全保障領域に集中し、その成果についても消極的な評価が支配的であったが、近年の研究では、国際連盟の社会政策へ関心が寄せられるようになり、連盟の達成した成果についてもより肯定的な見解が示されることが増えている。本研究も、このような研究史の流れにそうものである。提出論文の構成及び要旨は、以下の通りである。

「はじめに」では、国際連盟研究の関心が、「連盟はなぜ失敗したのか」から「連盟は何をなしとげたのか」に移行してきたことを指摘したうえで、連盟の国際衛生事業を再検討することの研究史的意義を述べている。そして連盟の国際衛生事業に関わったテクノクラート達の軌跡を追いかけることの意味づけを行い、人間の健康を取り巻く広範囲な衛生事業に取り組むことで、国際衛生事業をより身近な国際協調の場にしようという方向性を「ポジティブ・ヘルス」という概念で捉えることを提唱している。

「第Ⅰ部「ポジティブ・ヘルス」の出現」は、国際連盟設立期から、第二次世界大戦勃発までの歴史展開を扱いながら、連盟保健機関の経験と反省から「ポジティブ・ヘルス」という概念が生まれていく過程を検証する。「第一章 国際衛生協力の歴史的系譜」は、国際連盟設立前の国際衛生事業の展開を前史として扱い、連盟保健機関の設立経緯を論じている。「第二章 東アジアでの事業展開と国際関係 1925-1938」では、連盟保健機関の東アジアでの事業展開を実証的に検討し、それらの事業が日本や中国の対外政策とどのような関わりをもったかを明らかにしている。「第三章 伝染病の撲滅から「ポジティブ・ヘルス」へ—栄養問題への多角的な取り組み 1929-1943 年」は、世界恐慌を契機に、健康を単なる伝染病の撲滅だけではなく、より広範な社会・経済的問題から捉えようとする方向性が浮上していく文脈を検証し、「ポジティブ・ヘルス」という概念が登場したことの意義を強調している。

「第Ⅱ部「ポジティブ・ヘルス」の実現に向けて」は、第二次大戦前の連盟の活動に対する反省に基づき、戦中期の国際連盟から国際連合への移行期に、「ポジティブ・ヘルス」が確立する過程を論じる。「第四章 テクノクラート達の戦後構想 1943 年」は、連盟保健機関の 2 人のテクノクラート、レイモンド・ゴチエとイヴ・ビローと、連盟保健機関部長

を長年勤めたルートビッヒ・ライヒマンの戦後構想を対比的に扱い、両者の構想の違いが、それぞれ世界保健機関とユニセフの微妙な違いとして、第二次世界大戦後に継承された所以を明らかにしている。続く「第五章 国際連盟保健機関から世界保健機関へ 1943年—1945年」では、1943年秋に設立された連合国救済復興機関と連盟保健機関との微妙な関係を辿りながら、ダンバートン・オークス会議及びサンフランシスコ会議における保健衛生問題をめぐる議論を分析している。

「第Ⅲ部 「ポジティブ・ヘルス」の行方」は、国際連合によって確立した「ポジティブ・ヘルス」の諸相を、連盟期と比較しながら、戦後初期の国際政治の動向のなかで検討する。「第六章 世界保健機関の設立と初期の活動 1945年9月～1946年6月」は、サンフランシスコ会議で決定された国連の専門機関として国際衛生機関を置く構想を実現するために、ゴチエやビローが連合国の保健省役人と中小国の専門家に、それぞれの役割分担を認識しながら双方に働きかける巧みな戦術を取ったことが分析されている。そして、世界保健機関の憲章で、「ポジティブ・ヘルス」の方向性が明記されるに至る過程を検証している。「第七章 戦後初期東アジアにおける国際衛生事業 1946年-1953年」は、世界保健機関と並ぶいま一つの国際衛生機関であるユニセフの戦後初期東アジアにおける事業展開を論じている。本章では、ユニセフの対日援助活動が、一方ではアメリカの冷戦戦略と重なる側面を持ちつつも、ユニセフの活動自体は比較的中立且つ自立的に行われたことが指摘され、国際衛生事業は冷戦の直中にも、「ポジティブ・ヘルス」の実現に向けて小さな前進を続けていた、と結論づけられている。

「おわりに—国際政治のなかの国際衛生事業」は、これまでの議論を要約しつつ、冷戦終焉後における「ポジティブ・ヘルス」への関心の再度の高まりを指摘して、本論文の現代的意義を述べている。

以上が提出論文の要旨であるが、本論文は次のような点で評価することができる。第一に、本論文は、国際連盟期における国際衛生事業の歴史的展開を包括的かつ実証的に研究した邦語文献としては、初めての試みであることがあげられる。国際連盟研究が、「連盟はなぜ失敗したのか」から「連盟は何をなしとげたのか」に移行してきたことは著者の指摘する通りであるが、国際衛生行政について提出論文のような密度で掘り下げた研究は、これまで日本国内では存在しなかった。この意味で、国際連盟保健機関から、国際連合における世界保健機関、ユニセフへ到るまでの歴史的経緯を丹念に検証した本論文は、近年関心がとみに高まっている国際連盟の社会政策に関する研究のひとつの事例研究として、今後たえず参照されるものになることであろう。また本論文は、国際衛生行政という分野に即したグローバル・ガバナンスの歴史的研究としても読むことができ、広くグローバル・ガバナンスに関心を有する研究者にも刺激を与えるものである。

第二の長所として、本論文では、連盟の国際衛生事業を担ったテクノクラート達の思想と行動について、一次史料に基づいた丹念な検証がなされていることが挙げられる。ジュ

ネーヴの国際連盟文書館やパリのパストゥール研究所文書館の未公刊史料を渉猟しながら、著者は、ライヒマン、ゴチエ、ビローといった国際衛生行政のテクノクラート達の軌跡を再構成した。これらの人物は従来ほとんど言及されないか、言及されても、特定の争点に即して触れられるにとどまり、本論文のように、体系的に彼らの活動を検証したものはほとんどなかったといえる。本論文によって、機能的分野における国際協調の担い手について、より陰影に富んだ理解が可能になった点は、評価できよう。

第三に、本論文は、「ポジティブ・ヘルス」という概念を導入することで、国際連盟期の経験と反省がどのように国際連合に継承されたのか、という視野の広い問題設定を、国際連盟の社会政策研究に与えた点が評価される。このことにより本論文は、国際衛生行政という特定分野を扱いながら、国際連盟から国際連合への継承関係、とりわけ経済・社会政策分野における継承関係について、さまざまな問いを引き出し得る興味深いものになっている。

他方、本論文にも弱点といえる箇所がないわけではない。第一に、本論文は、国際連盟期には国際政治の動向によって翻弄された国際衛生行政が、テクノクラート達の巧みな戦術により、次第に自立性・中立性を獲得する側面を高く評価するという筋書きを描いているが、「ポジティブ・ヘルス」のような包括的な概念が、このような「行政」の「政治」からの自立性・中立性のみによって実現し得るのかは、少なくとも論理的には疑問が残るのではないか。人間の健康を経済・社会の広い文脈のなかで定位すれば、再度、「政治」による「行政」への介入が要請される、というやや逆説的な問題が、そこにはあるように思われる。その意味で、本論文における「政治」と「行政」の比較的静的な二分法は、より動態的に捉え直す必要があるのではないだろうか。

第二に、本論文では国際衛生行政の担い手としてテクノクラートの活動が重視されているが、一口にテクノクラートといっても、狭義の衛生行政にのみ関わった人々だけではなく、経済政策・労働問題など社会政策全体に関わった人々がそこにはいた筈である。テクノクラートも一枚岩の集団ではなく、専門分野の違いや、現業部門と政策統括部門の違いなどによって、衛生事業の位置づけ方にも微妙な差異が生じてくることを、より腑分けして論じたほうがよかったかもしれない。

しかしながら、これらの点は本論文の学術的価値をいささかも損なうものではない。総じて、本論文は、国際連盟期の国際衛生事業の歴史展開を実証的に扱った邦語文献としては初めてといってよい本格的研究であり、学界に対して多大な貢献をしたものと認めることができる。以上の点から審査委員会は、本論文の提出者は、博士（学術）の学位を授与されるのにふさわしいと判断する。